

インド思想における世界構成原理と身心論

— 「ナーラーヤニーヤ章」第 326 章および第 327 章を中心として—

三澤 祐嗣

1 はじめに

インドの 2 大叙事詩の一つである『マハーバーラタ』(Mahābhārata、略号: MBh)¹は、主軸の物語とは別に数々の挿話がなされ、特に 12 巻中の「モークシャダルマ篇」(Mokṣadharmā-Parvan, MBh 第 12 巻第 175-339 章)においては哲学説がまとまって説かれている。中でもサーンキヤと呼ばれる思想は多くの箇所でも説かれ、かなりの影響力があったことが窺い知れる。サーンキヤ思想はヒンドゥー教宇宙論の構築にあたって多大な寄与をなした思想であり、六派哲学というインドの伝統的学問体系の一つに数えられる。この思想は、世界を一定数の原理に分類し、すべての物質原理は根本原質(プラクリティ)から展開(開展)したものにすぎず、それとは別に精神原理(ブルシャ)を立て、これらの 2 つの原理を根本に据えるため二元論と呼ばれる。だが実際にはその両者は不可分の関係を持ち、両者が合わさることにより世界が展開することから、純粋な二元論とは言い難い。むしろこの思想のヒンドゥー教宇宙論に与えた決定的な影響は、身体を宇宙論に結びつけ、自己のこころのあり方の下に物質世界の創造を置いたことである。そのため、彼らの理論は、最高神からの複雑な展開を見せるヒンドゥー教において、現象世界の成り立ちの説明原理として取り入れられ、精神原理と根本原質はそのまま男性神とそのパートナーである女性神の関係に置き換えられている。

ヒンドゥー教諸派の中で、サーンキヤ説など様々な説を融合させ、壮大な宇宙論を築いたのがパーンチャラートラ派である。彼らはヴィシュヌ派の伝統の中で最も早期に成立したものの一つであり、その思想が「モークシャダルマ篇」の中に見られるが、それは「ナーラーヤニーヤ章」(Nārāyaṇīya-Parvan, MBh 第 12 巻第 321-339 章)と呼ばれる。サーンキヤ思想はパーンチャラートラ派の宇宙論の形成に関して多大なる影響を与えたものであり、「ナーラーヤニーヤ章」において、特に関係が深いものとして言及されている。ただし、この「ナーラーヤニーヤ章」を始め MBh で見られるサーンキヤ説は体系化された理論とは異なり、様々な異説が見られることに注意しなければならない。体系化以前の異説は様々な文献に散見しているが、MBh を中心に説かれた説はエピック・サーンキヤと呼ばれ、体系化されたものとはまた違った形で後代に影響を与えている。一方、体系化されたサーンキヤ説は古典サーンキヤと呼ばれ、学派の中心的な思想を為すものである。

この「ナーラーヤニーヤ章」はパーンチャラートラ派の初期形態を説くものとして注目されてきたが、サーンキヤ説の観点からの検証は不十分に思われる。そこで、本論文では、「モークシャダルマ篇」第 326 章と第 327 章において、創造説について説かれた箇所に着目し、他のエピック・サーンキヤ説との比較を通じ、その内容を明らかにしたい²。

2 第 327 章における 8 つの原理

第 327 章において、まず、最初の原理として、至高のアートマン (paramātman) が言及される。

paramātmēti yaṁ prāhuḥ sāmkyayogavidō janāḥ /

mahāpuruṣasamjñām sa labhate svena karmaṇā // MBh 12.327.24

サーンキヤ・ヨーガを知る人々は、それ（カルパの始めにおいて展開したもの）を至高のアートマンと言った。それは、大なるプルシャ（mahāpuruṣa）という名を、自己の行為によって、獲得している。

このように至高のアートマンは、大なるプルシャ（mahāpuruṣa）とも呼ばれる。そして、それから展開するものは次の通りに説かれる。

tasmāt prasūtam avyaktaṁ pradhānaṁ tad vidur budhāḥ /

avyaktād vyaktam utpannaṁ lokasṛṣṭyartham īśvarāt // MBh 12.327.25

それから生じた未顕現（avyakta）を覚者達はかのプラダーナ（根本原理、第一のもの）と知る。世界創造のために、主宰神（īśvara）である未顕現（avyakta）³から顕現（vyakta）が生起した。

すなわち、至高のアートマンから、未顕現（avyakta）が展開する。そして、その未顕現から顕現（vyakta）が生じるのである。未顕現は、すなわち未だ顕れていない状態であり、そしてプラダーナ（第一のもの）と呼ばれることから、物質的な根源であることが想定される。また、未顕現は主宰神（īśvara）とも呼ばれる。

さて、顕現とは何か、次のように説かれる。

aniruddho hi lokeṣu mahān ātmeti kathyate /

yo 'sau vyaktatvam āpanno nirmame ca pitāmahaḥ /

so 'haṁkāra itī proktaḥ sarvatejomayo hi saḥ // MBh 12.327.26

実に、〔それは〕世界において、アニルツダ、大なるアートマン（mahān ātmā、マハットというアートマン）と言われる。そして、この顕現性（vyaktatva）を獲得したもの（アニルツダ）は、祖父を作り出した。それが、アハンカーラであると言われる。実に、それは、あらゆる光からなるもの（sarvatejomaya）である。

このように顕現は大なるアートマンと呼ばれる。そして、アニルツダという神格と同一視されている。アートマンとは自己の究極的な主体を示す言葉であるが、24偈で説かれた至高のアートマンは、未顕現を生み出すこと、そして、大なるプルシャと呼ばれることから、最高原理あるいは最高神を示すと考えられる。一方、ここで説かれる大なるアートマンは、「大なる」（マハット）という名称から、至高のアートマンとは区別され、個々人の主体として想定されていると考えられる。

そして、この大なるアートマンからは、アハンカーラが出現する。アハンカーラは、自我意識とも訳されるように、知覚した対象などを自己に結びつける器官であり、こころの作用の一つである⁴。さらに、祖父（pitāmaha）とも同一視されている。

アハンカーラからの展開は次の通りである。

ṛthivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam /

ahaṁkāraprasūtāni mahābhūtāni bhārata // MBh 12.327.27

地（ṛthivī）、風（vāyu）、虚空（ākāśa）、水（āpas）、〔粗大元素の〕5番目としての火（jyotiś）⁵、〔これらの〕粗大元素は、アハンカーラから生み出されたものである、バラタ族の者よ。

アハンカーラからは、地（ṛthivī）、風（vāyu）、虚空（ākāśa）、水（āpas）、火（jyotiś）という5粗大元素が生み出される。この粗大元素が実際の物質を形作るものになるものである。

以上のように、至高のアートマン→未顕現→大なるアートマン→アハンカーラ→5粗大元素という展開のパターンが考えられる。至高のアートマンは、最高原理あるいは最高神を示すことから、古典サーンキヤのような個々人の究極的主体としてのプルシャというより、ヴェーダ聖典に見られる原人プルシャとしてのイメージを彷彿とさせ

る。さらに、古典サーンキヤでは精神原理としてのプルシャから直接に物質が生み出されることはないが、ここでの原理展開はプルシャから未顕現が生まれることが明示され、一元論的な傾向にあると考えられる。そして、それ以外の8つの原理（未顕現、大なるアートマン、アハンカーラ、5粗大元素）が、実際に物質世界を構成し、生み出すものとして考えられているのであろう。この8つの原理が物質的な根源として想定される説は随所に見られる⁶。それらの説では、8種の根本原因（プラクリティ）とそこから展開したと想定される16種の変異（ヴィカーラ）が説かれている。おそらく、当時流布していた説を取り込んだものと考えられる。

3 第327章における原理と神格・聖仙の対応

上述した原理展開において、3つの原理には、それぞれ神格が対応していることが見いだせる。すなわち、未顕現（avyakta）には主宰神（īśvara）が、大なるアートマンにはアニルツダが、アハンカーラには祖父（pitāmaha）が対応している。この祖父はブラフマーのことである。それは次の偈から明らかである。

vedān vedāngasamyuktān yajñān yajñāngasamyutān /

nirmame lokasiddhyartham brahmā lokapitāmahaḥ / MBh 12.327.30a-d

諸々のヴェーダ補助学を含むヴェーダと、諸々のヤジュニヤ補助学を含むヤジュニヤを、世界の祖父であるブラフマーは、世界の完成のために創造した。

また、大なるアートマンに対応するアニルツダはヴェーハ神の一柱である。ヴァースデーヴァ、サンカルシャナ、アニルツダ、プラディユムナから成る、パーンチャラートラ派に特徴的なこの創造説は、すでにMBhにおいても言及される⁷。しかし、この第327章の説では、他の3神は見いだせず、アニルツダのみが言及されている。

このように、未顕現だけでなく、自己の主体やこころの器官に相当するものに神格が対応しているあたり、神話が入り交じった創造説の表れであると考えられる。特に、アハンカーラは後代では誤謬を生み出す原因とも考えられるようになり、ここではそのようなマイナスイメージがないことは、神格と対応させていることから窺い知れるだろう。

この章では、8種の根本原因と16種の変異の説に類似した原理展開が想定されるが、16種の変異は見いだせない。5粗大元素の展開以降は、不明な点が多い。まず、次のように説かれる。

mahābhūtāni sṛṣṭvātha tadguṇān nirmame punaḥ /

bhūtebhyaś caiva niṣpannā mūrtimanto 'ṣṭa tāñ śṛṇu // MBh 12.327.28

〔アハンカーラは〕諸々の粗大元素を創造し、次に、それぞれのグナを作り出した。そしてまさに、諸々の存在物（bhūta）のために（から？）、8つの物質形態を持つものが生じた。それらをあなたは聞け。

粗大元素の創造の後に、アハンカーラからそれぞれグナ（属性、性質）が創造される。このグナとはおそらく5つの知覚器官の対象（香り、接触、音声、味、色）と考えられる⁸。アハンカーラから5つの知覚器官の対象が生まれる説はMBh 12.291に見られる⁹。

そして、次に8つの物質形態について述べられる。8つの物質形態が如何なるものかは、次の偈に示される。

marīcir āngirās cātriḥ pulastyah pulahaḥ kratuḥ /

vasiṣṭhaś ca mahātmā vai manuḥ svāyambhuvas tathā /

jñeyāḥ prakṛtayo 'ṣṭau tā yāsu lokāḥ pratiṣṭhitāḥ // MBh 12.327.29

実に、〔その8とは〕マリーチ、アンギラス、アトリ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、そして偉大なる魂を持つものであるヴァスイシュタ、さらにマヌ・スヴァーヤンブヴァである。それらが、そこにおいて世界が安定しているところの8つのプラクリティであると知るべきである。

以上のように、8つの物質形態は8つのプラクリティ（根本原因）と呼ばれ、それぞれ、マリーチ、アングラス、アトリ、プラスチック、ブラハ、クラトゥ、ヴァスイシュタ、スヴァーヤンブヴァという、聖仙たちの名が与えられている。これらの8人の内、スヴァーヤンブヴァを除いた7人は、「7人の聖仙」（saptarṣi）として列挙される者たちであり、ブラフマーの精神的息子とされる¹⁰。スヴァーヤンブヴァはブラフマーの息子（あるいは精神的な息子）とされ、マヌたちの最初の者（第一のマヌ）とされる¹¹。同章の61偈では、7人の聖仙について説かれており¹²、『マヌ法典』¹³では聖仙たちが創造説に関与して、10人が列挙される¹⁴。8人の聖仙がプラクリティと同定されている説は「ナーラーヤニーヤ章」の第322章に見られる¹⁵。

8つの物質形態（8人の聖仙）は何から生まれるのか。“bhūtebhyaḥ”を「存在物（bhūta）から」と考えれば、5粗大元素から8つの物質形態が生じると考えることができるであろう。しかし、次のようにも説かれることも考慮したい。

astābhyaḥ prakṛtibhyaś ca jātaṃ viśvam idaṃ jagat // MBh 12.327.30ef

そして、8つのプラクリティから、このあらゆる世界は生まれた。

すなわち、8プラクリティということから、現象世界を生み出す原理として想定されているのである。そのため、MBh 12.327.28での“bhūtebhyaḥ”が、「5粗大元素から」ではなく、「存在物のために」8つの物質形態が生まれたと解することもできる。そうすると、この8人の聖仙たちそれぞれに、未顕現、大なるアートマン、アハンカーラ、5粗大元素が対応すると考えることもできる。あるいは、ブラフマーの精神的な息子とされるため、ブラフマーと同一視されるアハンカーラから生み出されるとも考えられる。いずれにせよ、これらの記述だけでは、確定することは困難であろう。

一方、変異については次のように説かれる。

rudro roṣātmako jāto daśānyān so 'srjat svayam /

ekādaśaite rudrās tu vikārāḥ puruṣāḥ smṛtāḥ // MBh 12.327.31

怒りの性質を持つルドラが生まれ、彼は、自ら他の10のものを生んだ。これら11のルドラは、変異したプルシャと言われる。

怒りの性質を持つルドラがどこから生まれるのか明かではないが、このルドラから、10のルドラが生まれ、合計11となったルドラは、変異したプルシャと呼ばれる。8種の根本原因と16種の変異の説において、16種とは、マナス（思考器官）、5知覚器官、5行為器官という11のインドリヤ（感覚器官）と、5つの知覚器官の対象を示している。ここでは、1+10ということから、11のインドリヤ（感覚器官）を示しているのかも知れない。

そして、次のように説かれる。

te rudrāḥ prakṛtiś caiva sarve caiva surarṣayah /

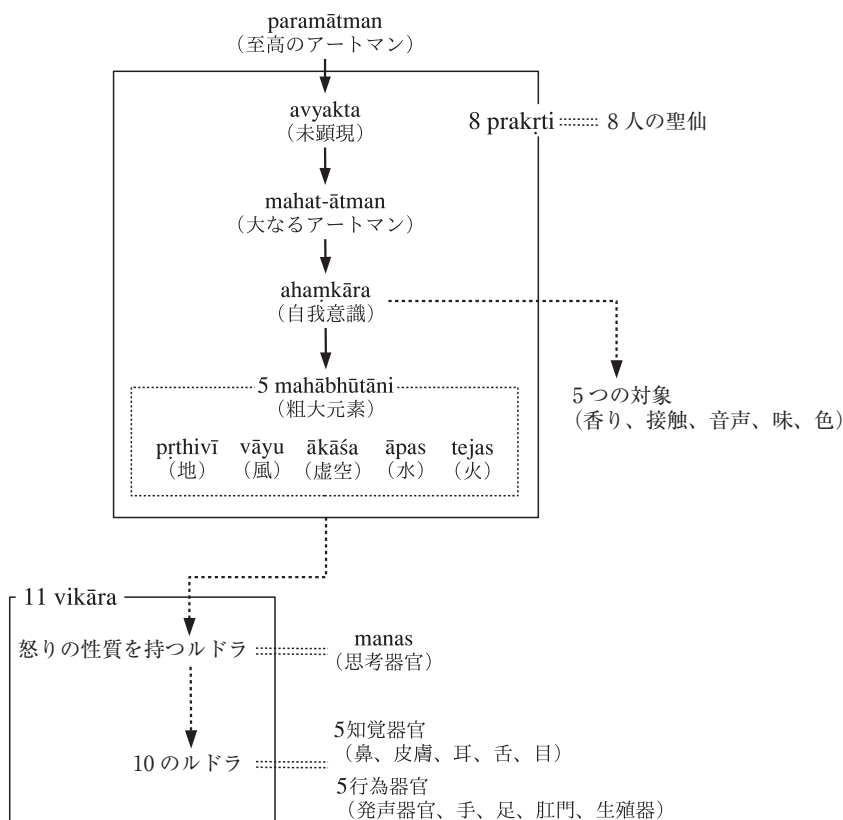
utpannā lokasiddhyartham brahmāṇaṃ samupasthitāḥ // MBh 12.327.32

まさにこれらのルドラたちとプラクリティとあらゆる神仙たちは、世界の完成のために生まれたものであり、ブラフマーに近づいたものである。

11のルドラたち、プラクリティ、神仙たちが世界を完成させるために生まれたと言うことが説かれる。神仙たちというのは先に挙げた8人のことであろうか。しかし、27偈では8つであったプラクリティが単数で示され、同定されているはずの聖仙たちとも区別され、判然としない。そして、これら世界を構成するものたちは、ブラフマーに近づいたということから、ブラフマーと同じく創造者としての機能を持つものと考えられることができる。

以上のように、サーンキヤの原理展開と類似しながらも、神話的要素が混ざり、より一層複雑な展開を示してい

る。これらの展開は図表 1 のように考えられる。



図表 1 MBh 12.327 における原理展開

4 第 326 章における原理展開とヴェーハ説

ヴェーハ説 (vyūha) とは、「配置」などを意味し、パーンチャラートラ派の創造説の中で最も特徴的なものである。それは、ヴァースデーヴァ、サンカルシャナ、プラディユムナ、アニルツダという 4 柱の神々の顕現である。

サンカルシャナは別名バラバドラとも呼ばれ、ヴァースデーヴァの兄である。また、プラディユムナとアニルツダはそれぞれヴァースデーヴァの息子と孫である。ヴェーハの神格は、上記の 4 名にサーンバを足した、ヴリシュニ族の 5 人の英雄が元になっているとされるが、いつのころからかサーンバは除外され、ヴァースデーヴァを頂点とするヴェーハが形成されたという¹⁶。後代のパーンチャラートラ派の文献で説かれる説では、これらの神が 6 つの属性の配分によりそれぞれ顕現する。「知識」(jñāna) と「力」(bala) の組み合わせはサンカルシャナ、「自在力」(aiśvarya) と「勇猛さ」(vīrya) の組み合わせがプラディユムナ、「潜在力」(śakti) と「光輝」(tejas) の組み合わせはアニルツダ、ヴァースデーヴァは 6 つの属性全てを備えるのである。これら 4 神は創造の順序があり、ヴァースデーヴァ→サンカルシャナ→プラディユムナ→アニルツダの順で顕現する。

まず、第 326 章では、25 の原理¹⁷ が想定されていることが次の偈から分かる。

dvir dvādaśebhyas tattvebhyaḥ khyāto yaḥ pañcaviṃśakah /
puruṣo niṣkriyaś caiva jñānadṛśyaś ca kathyate // MBh 12.326.23

25 番目と呼ばれるものが、24 番目の原理より [超えて存在する]。それは、まさにプルシャ、無活動のものであり、知によって見ることができると言われる。

yaṃ praviśya bhavantīha muktā vai dvijasattama /
sa vāsudevo vijñeyaḥ paramātmā sanātanaḥ // MBh 12.326.24

再生族の最上者よ。彼に入ってまさにあなたたちに解脱があるところのその者がヴァースデーヴァであり、至高のアートマンであり、永遠なるものであると知るべきである。

この 25 番目の原理がヴァースデーヴァである。そして、それはプルシャであり、至高のアートマンとされる。このような最高存在の特徴は次のようにも説かれる。

paśya devasya mähātmyaṃ mahimānaṃ ca nārada /

śubhāśubhaiḥ karmabhir yo na lipyati kadācana // MBh 12.326.25

神の威光と偉大さを見よ。ナーラダよ。善と悪の行為によって、その者はいかなる時も汚されない。

sattvaṃ rajasaṃ tamaś caiva guṇān etān pracakṣate /

ete sarvaśarīreṣu tiṣṭhanti vicaranti ca // MBh 12.326.26

まさにこれらのグナを、サットヴァ、ラジャス、タマスと呼ぶ。それら（グナ）はあらゆる身体において存在し、活動する。

etān guṇāṃs tu kṣetraijño bhunkte naibhiḥ sa bhujyate /

nirguṇo guṇabhuk ca eva guṇasraṣṭā guṇādhikāḥ // MBh 12.326.27

しかし、これら諸々のグナをクシェートラジュニヤは享受するが、それはこれらによっては享受されない。まさに〔その者〕は、グナがないもの、グナを享受するもの、グナの創造者、グナの超越者である。

このように、グナを越えたものがヴァースデーヴァであり、ここではクシェートラジュニヤと呼ばれている¹⁸。それは何によっても汚されず、純粹で清浄であり、グナを享受することから、古典サーンキヤのプルシャのごとく観照する存在としても示されている¹⁹。

次にこのような最高存在への帰滅の様子が説かれる。

jagatpratiṣṭhā devarṣe pṛthivy apsu pralīyate /

vyotīṣy āpas pralīyante jyotir vāyau pralīyate // MBh 12.326.28

世界の基盤である地は水に帰滅する。神仙よ。水は火に帰滅し、火は風に帰滅する。

khe vāyuh pralayaṃ yāti manasy ākāśaṃ eva ca /

mano hi paramaṃ bhūtaṃ tad avyakte pralīyate // MBh 12.326.29

風は虚空に帰滅する。そしてまさに虚空はマナスに〔帰滅する〕。実に最高の存在物であるマナスは未顕現に帰滅する。

avyaktaṃ puruṣe brahman niṣkriye saṃpralīyate /

na asti tasmāt parataraṃ puruṣād vai sanātanāt // MBh 12.326.30

未顕現は無活動のプルシャに帰滅する。バラモンよ。その永遠なるプルシャより高次なるものは存在しない。

ここでの帰滅のラインは、地→水→火→風→虚空→マナス→未顕現→プルシャ、ということが想定される。ここでは、アハンカーラやマハット（あるいは大なるアートマン）に相当するものが見られない。また、プルシャとヴァースデーヴァは、同一のものと考えられている。23 偈でもすでに説かれており、またこの 30 偈でも、それよりも高次のものが存在しないと明言していることから明らかであろう。そして、そのヴァースデーヴァであるプルシャへと世界が帰滅していくことから、一元論的な創造説を読み取ることができる。

また、粗大元素については次のようにも説かれる。

prthivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam /

te sametā mahātmānaḥ śarīram iti saṃjñitam // MBh 12.326.32

地、風、虚空、水、そして〔粗大元素の〕5番目としての火がある。それら大なる原理（mahātman）の集合したものが、身体と呼ばれる。

原理の展開については、言及されていないが、帰滅の逆をたどるのであれば、虚空→風→火→水→地ということが想定できるであろう。そしてこの5粗大元素が身体を構成するものとして説かれている。

一方、身体を活動させるものとして、ジーヴァ²⁰が説かれる。

na vinā dhātusaṃghātaṃ śarīraṃ bhavati kvacit /

na ca jīvaṃ vinā brahman dhātavaś ceṣṭayanty uta // MBh 12.326.34

どこにおいても、要素（＝粗大元素）の集合なしに、身体は存在しない。バラモンよ。そして、ジーヴァなしに、諸々の要素は、〔身体を〕活動させることさえできない²¹。

粗大元素の集合なしには身体は存在できず、また、ジーヴァなしには身体は活動することができないのである。また、身体には、「見られることのできない、速い足取りのもの」が入るとされる。

tad āviśati yo brahmann adṛśyo laghuvikramaḥ /

utpanna eva bhavati śarīraṃ ceṣṭayan prabhuḥ // MBh 12.326.33

バラモンよ。見られることのできない、速い足取りのもの²²が、それ（身体）²³に入ってくる。まさに〔それが〕生起したものであり、身体を活動させる力強いものである。

この「見られることのできない、速い足取りのもの」はGanguliに従えば、ヴァースデーヴァを意味すると考えられるかもしれないが、生起したものであり、身体を活動させる力強いものであることから、ジーヴァと考える方が妥当であろう。それはまた、次のようにも説かれるからである。

sa jīvaḥ paraśaṃkhyātaḥ śeṣaḥ samkarṣaṇaḥ prabhuḥ / MBh 12.326.35ab

そのジーヴァは、シェーシャ（鞆）、サンカルシャナ、プラブ（力強いもの）が〔異名として〕列挙される。

このように、ジーヴァはサンカルシャナと見なされる。

tasmāt sanatkumāratvaṃ yo labheta svakarmanā // MBh 12.326.35cd

yasmimś ca sarvabhūtāni pralayaṃ yānti saṃkṣaye /

sa manaḥ sarvabhūtānāṃ pradyumnaḥ paripaṭhyate // MBh 12.326.36

それ（ジーヴァ）より自らの行為によってサナトクマーラ性を把握するもの、そして、そこにおいてあらゆる存在物が消滅のときに還滅にいたるところのもの、それが、あらゆる存在物にとってのマナスであり、プラディウムナと言及される。

後に明言されるが、ジーヴァすなわちサンカルシャナからプラディウムナが生起することが想定されている。そして、そのプラディウムナはマナスと同一視されている。さらに、万物が帰滅するところともされる。

次にアニルツダも登場する。

tasmāt prasūto yaḥ kartā kāryaṃ kāraṇaṃ eva ca /

yasmāt sarvaṃ prabhavati jagatsthāvaraṅgamam /

so 'niruddhaḥ sa īśāno vyaktiḥ sā sarvakarmasu // MBh 12.326.37

それより生じた、まさに、作者、結果、原因であるもの、それより世界の動かないものと動くものの全てが生じるところのもの、それがアニルツダであり、それが支配者であり、それはあらゆる行為おける顕現である。

プラディウムナからアニルツダが現れるのである。そしてそのアニルツダは、すべてが生じるところであり、顕現とも言われる。

このように、4 ヴューハ神について説かれたが、また次のようにも説かれる。

yo vāsudevo bhagavān kṣetrajñō nirguṇātmakah /

jñeyah sa eva bhagavān jīvaḥ saṁkarṣaṇah prabhuḥ // MBh 12.326.38

聖なるヴァースデーヴァはクシェートラジュニヤであり、グナを持たないことを本質とするものであり、まさにそれこそが、聖なるジーヴァであり、サンカルシャナであり、プラブ（力強きもの）であると知るべきである。

ここは非常に疑問が残る箇所である。ヴァースデーヴァとクシェートラジュニヤが、そして、サンカルシャナとジーヴァが同一であることがすでに説かれたものである。だが、ここでは、ヴァースデーヴァとサンカルシャナが同一であるとみなすことができる。これでは、矛盾が生じてしまう²⁴。ここでは、ヴァースデーヴァからサンカルシャナが生起すると捉えるべきところである。あるいは、ヴァースデーヴァとサンカルシャナは、その本質は変わらず、単なる現れの違いにすぎないということが想定されているのかもしれない。

これらヴューハ神が、諸原理と対応することが次の偈に説かれる。

saṁkarṣaṇāc ca pradyumno manobhūtaḥ sa ucyate /

pradyumnād yo 'niruddhas tu so 'hamkāro maheśvaraḥ // MBh 12.326.39

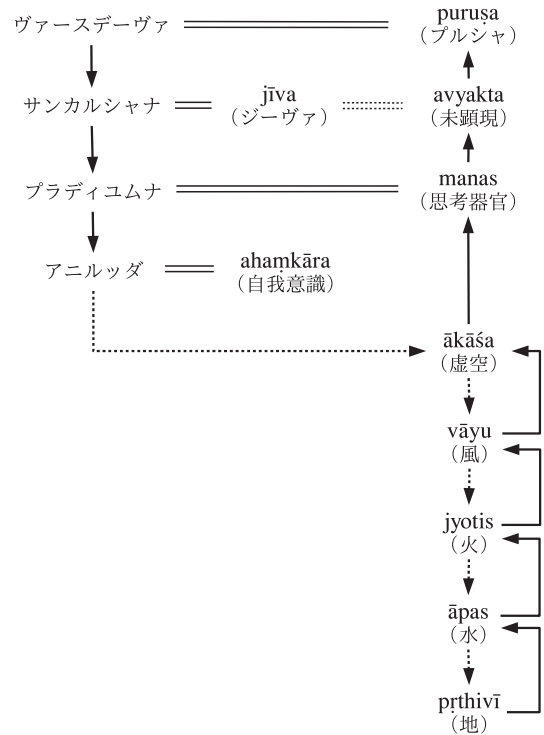
そして、サンカルシャナからプラディウムナが〔現れる〕。それ（プラディウムナ）はマナス原理と言われる。一方、プラディウムナからアニルツダが〔現れる〕。それ（アニルツダ）はアハンカーラであり、マヘーシュヴァラである。

サンカルシャナからプラディウムナが現れ、プラディウムナからアニルツダが現れる。すなわち、サンカルシャナ→プラディウムナ→アニルツダ、という展開となる。

そして、プラディウムナはマナスに、アニルツダはアハンカーラと同定される。サンカルシャナはジーヴァであることはすでに説かれているため、それらに当てはめると次のことが想定できる。すなわち、ジーヴァ→マナス→アハンカーラ、というラインである。マナスからアハンカーラが生起する説は、『マヌ法典』に見られる²⁵。ここでの創造説は不明瞭な点が多く、うまく整合性を取れなかった可能性も否定できない²⁶。

第 326 章では、ヴューハ神と原理を同定した説が見られ、その展開は図表 2 のよに想定できる。プラディウムナとマナスが、サンカルシャナとジーヴァが同一にみなされていることは明らかであり、そのことから、サンカルシャナと未顕現を同一とみなすことができるかもしれない。同様に、虚空、アニルツダ、アハンカーラの 3 つが同一のものと想定できるかもしれないが、虚空とアハンカーラが同一のものとは考えにくい。

むしろ、この第 326 章では、創造と帰滅のラインは異なるのかもしれない。プラディウムナは万物が帰滅するところとされ、アニルツダは生じるところとされるからである。すなわち、創造に際してはアハンカーラであるアニルツダから虚空が生じ、帰滅に際してはマナスであるプラディウムナに虚空が帰滅するのである。



図表2 MBh 12.326におけるヴェーハ神と諸原理の展開

5 おわりに

326章と327章とでは、同じ「ナーラーヤニーヤ章」といえども異なる説がいくつも見られる。第327章の説では至高のアートマン→未顕現→大なるアートマン→アハンカーラ→5粗大元素というパターンが考えられ、アハンカーラと虚空は別物である。しかし、326章では、虚空とアハンカーラの関係性は不明瞭であり、アハンカーラはマナスから生み出されるものとも考えられる。また、アニルツダに関しては、327章では大なるアートマンと、326章ではアハンカーラと同一視されており、ヴェーハ神と原理の対応は一定していないようである²⁷。さらに、326章では、同じ章の中でも展開が一定せず、矛盾が生じている。

以上のように、様々な説について見られるが、明らかな矛盾の箇所が見られ、まだ未体系の段階であることが伺える。おそらく、様々な説を取り入れ折衷したはいいものの、整合性が取れなくなってしまったのであろう。しかし、そこにはヴェーハ神とサーンキヤ説を融合させ、創造説を構築しようとしている足跡が見られる。最高神からの展開に、神話的要素や心身論を組み込んだ宇宙論の形成が試みられているのである。後代のパーンチャラートラ派の宇宙論では、さらに様々な説を組み込むことにより、一層複雑さを増し、最高神から現象世界までの創造は長い道のりを必要とする。そこには、おそらく、過去の思想を取り込むことにより、自派の説の優位性を確立しようとする、インド思想に特徴的な思考方法が見いだせる。そのため、その思考方法が、様々な説を折衷融合させた宇宙論を作り上げてきた原因の一つと考えられる。本論文では限定的な議論しか行えなかった。パーンチャラートラ派の宇宙論をより精緻に分析するためには、後代の文献も幅広く取り上げ、解明していく必要があるであろう。

参考文献

- Belvalkar, Shripad Krishna ed. (1954) *The Śāntiparvan: being the twelfth book of the Mahābhārata: the great epic of India for the first time critically edited*, Part 3. Mokṣadharmā, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Ganguli, Kisari Mohan ed. (1975) *The Mahābhārata of Krishna-Dwaipayana Vyasa*, Vol. X, Santi Parva part III, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
- Johnston, E. H. (1974) *Early Sāṃkhya: An Essay on its Historical Development according to the Texts*, Delhi: Motilal Banarsidass, reprinted edition.

- Mani, Vettam ed. (1975) *Purāṇic Encyclopaedia*, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Miśra, Maṇḍana and Nag Sharan Singh eds. (1988) *Śrīmanmahābhāratam: Caturdharavaṃśāvataṃsaśrīmannīlakaṇṭhavaricitabhāratabhāva dīpākhyāṭīkāyā sametam*, Vol. 6: Nag Prakāśaka.
- Olivelle, Patrick (2005) *Manu's Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmāśāstra*, Oxford University Press.
- Rastelli, Marion (2009) "Pāncarātra," in Jacobsen, Knut A. ed. *Brill's Encyclopedia of Hinduism*, Vol. 3, Leiden: BRILL, pp. 444-457.
- 中村了昭 (1998) 『マハーバーラタの哲学：解脱法原典解明 下』, 平楽寺書店.
- 引田弘道 (1997) 『ヒンドゥータントリズムの研究』, 山喜房佛書林.
- 渡瀬信之 (2013) 『マヌ法典』, 東洋文庫, 平凡社.
- ヴィンテルニッツ・中野義照 [訳] (1965) 『叙事詩とプラーナ』, インド文献史第2巻, 日本印度学会.

註

- 1 全18巻と補遺からなり、その詩節の数はおよそ215,000偈にのぼる。*Mahābhārata*とは、mahā (偉大な) bhārata (バラタ族)、つまり、「偉大なるバラタ族の物語」であり、同族内での戦争物語を主軸としつつも、数々の挿話がなされて、百科全書とも言える内容を持っている。伝説上作者はヴィヤーサ (Vyāsa) に帰せられる。主軸の戦争物語が最も古くに完成し、紀元前4世紀から紀元後4世紀頃の間にはほぼ現在の形が成立したとされる [ヴィンテルニッツ・中野 1965]。
- 2 MBhには多数の版があるが、本論文ではCritical Edition [Belvalkar 1954]を用いた。その他に一部ではあるが、ニールカクタ註が付されたプーナ版 [Miśra and Singh 1988]も参照した。「モークシャダルマ篇」の和訳としては、Critical Editionに対する茂木秀淳氏により学術雑誌上で随時発表されているが、本箇所のはまだ発表されていない。プーナ版「モークシャダルマ篇」の全訳としては中村了昭氏のもので出版されている [中村 1998]。
- 3 中村氏は「自在力ある未顕現」と訳す [中村 1998: p. 949]。
- 4 アハンカーラについてはすでにウパニシャッドにおいても言及されている。例えば、*Chāndogya Upaniṣad* 7.25.1では、自己に結びつける機能について説かれている。あるいは、*Śvetāśvatara Upaniṣad* 5.8や*Maitrāyaṇīya Upaniṣad* 6.5では、ブッディ、マナスと共に心の機能あるいは器官として説かれている。
- 5 このMBh 12.327.27abと全く同じ一文がMBh 12.187.4abとMBh 12.298.11abにおいて見られる。
- 6 MBh 12.203, 291, 298、『チャラカ・サンヒター』4.1、『ブッダ・チャリタ』12などで見られる。ただしこれらの説では細部が異なることに注意が必要であろう。『バガヴァッド・ギーター』(MBh 6.29.4)でも8種が列挙されているが、未顕現がなく、マナスがあげられている。
- 7 本稿4を参照。
- 8 MBh 12.203では、粗大元素と5つの対象の関係が次のように説かれている。
 tadvat somaguṇā jihvā gandhas tu pṛthivīguṇaḥ /
 śrotraṃ śabdaguṇaṃ caiva cakṣur agner guṇas tathā /
 sparśaṃ vāyuguṇaṃ vidyāt sarvabhūteṣu sarvadā // MBh 12.203.32
 同様に、全ての存在物において、舌(味覚)は水[元素]のグナ(属性)であり、また、香りは地[元素]のグナ(属性)である。耳(聴覚)は音声のグナ(属性)であり、そしてまた、目(視覚)は火[元素]のグナ(属性)である。さらに、接触は風[元素]のグナ(属性)である、と常に知るべし。
 対応が一定していないため不明瞭ではあるが、粗大元素のグナとして5つの対象が対応していることが見いだせる。この対応は、例えばMBh 12.187.8-10abでも見られ、古典サーンキヤでも説かれる。第203章での説を考慮すれば、この327章のグナには感覚器官も含まれるかもしれないが、11のルドラとの対応が不明瞭である。
- 9 bhūtasargam ahaṃkārat tṛtīyaṃ viddhi pāṛthiva /
 ahaṃkāreṣu bhūteṣu caturthaṃ viddhi vaikṛtam // MBh 12.291.23
 アハンカーラからの存在物の創造を第3と知れ。ブリター夫人の子よ。[また、] 諸々のアハンカーラ [から生まれた] 存在物における変異したもの (vaikṛta) を第4と知れ
 vāyur jyotir athākāśam āpo `tha pṛthivī tathā /
 śabdaḥ sparśaś ca rūpaṃ ca raso gandhas tathā eva ca // MBh 12.291.24
 風、火、虚空、水、地、並びに、音声と接触と色、味、香り、実に [それらが、それぞれ] である。
 evaṃ yugapad utpannam daśavargam asaṃśayam / MBh 12.291.25ab
 このように、同時に10からなる集まりが生じたことに、疑いない。
- 10 [Mani 1975: p.691]
- 11 [Mani 1975: p.779]
- 12 marīcir aṅgirāś cātriḥ pulastyaḥ pulahaḥ kratuḥ /
 vasiṣṭha iti saptaite mānasā nirmitā hi vai // MBh 12.327.61

- マリーチ、アングラス、アトリ、プラスティヤ、ブラハ、クラトゥ、ヴァスイシュタ、以上、これらの7人が〔ブラフマーの〕精神的なもの (mānasa) として創造された。
- 13 ダルマシャーストラ文献の1つであり、紀元前2世紀から紀元後2世紀の間に成立したと考えられている。ダルマシャーストラとは、「ダルマ (dharma) に関する教え」を意味し、一般には「法典」と訳されるが、法律よりもはるかに幅の広い行為規範である [渡瀬 2013: pp. 449-500]。
- 14 ここで説かれる8人からスヴァーヤンブヴァを除いた「7人の聖仙」とブラチェータス、ブリグ、ナーラダである。[渡瀬 2013: p. 26]
- 15 marīcir atryaṅgirasau pulastyaḥ pulahaḥ kratuḥ /
vasiṣṭhaś ca mahātejā ete citraśikhaṇḍinaḥ // MBh 12.322.27
マリーチ、アングラスとアトリ、プラスティヤ、ブラハ、クラトゥ、そして威光あるヴァスイシュタ、これらがチトラシカンディンである。
sapta prakṛtayo hy etās tathā svāyambhuvo aṣṭamaḥ /
etābhīr dhāryate lokas tābhyah śāstram viniḥśṛtam // MBh 12.322.27
実に、これらが7プラクリティであり、さらにスヴァーヤンブヴァが8番目である。それら (7人) によって世界は維持され、それら (7人) から教典 (śāstra) は流れ出た。
- 16 [Rastelli 2009: p. 444]
- 17 古典サーンキヤにおける25の原理とは、プルシャ (精神原理)、プラクリティ (根本原質)、ブッディ (統覚器官)、アハンカーラ (自我意識)、マナス (思考器官)、5知覚器官、5行為器官、5微細要素、5粗大元素である。一方、エピック・サーンキヤでは列挙されているものは類似しているが、展開の順序が異なる。また、原理の数が異なる場合もある。
- 18 土地 (クシェートラ) を知るもの (ジュニヤ) であり、知田者とも訳される。プルシャのことである。
- 19 古典サーンキヤではプルシャ (精神原理) が観照し、プラクリティ (根本原質) がそれにより活動を開始することで世界の展開が始まるという二元論が説かれる。しかし、先にあげた第327章の説のように、エピック・サーンキヤでは、プルシャを最高神と同定し、プルシャからプラクリティが生まれるという一元論的な傾向の説も見られる。
- 20 ジーヴァがどのようなものか、サーンキヤ思想のなかでは明確に示されていない。特に叙事詩において、ジーヴァは、「精神ではなく、プラーナ (prāna) の性質を帯びた活動的にさせる原理であり、輪廻において身体から身体へ移動するもの」とされる [Johnston 1974: p. 44]。これは古典サーンキヤで説かれるところの微細な身体のイメージと重なる。
- 21 プーナ版では、“dhātavaś”ではなく“vāyavaś”となっており [Mīśra and Singh 1988: p. 246]、中村氏は「〔五〕風は〔身体を〕活動させることができない」と訳している [中村 1998: p.932]。
- 22 “laghuvikrama”は、「軽く、素早いステップ」という意味であるが、Ganguli は “the puissant Vasudeva” と訳す [Ganguli 1975: p. 135]。中村氏は「足の速いもの」と訳し、ヴァースデーヴァと解する Ganguli 訳を参照している [中村 1998: p.932]。
- 23 Ganguli は “that combination of the five primal elements, called body” と訳しており [Ganguli 1975: p. 135]、著者もそれに従い身体と解した。
- 24 ヴァースデーヴァとサンカルシャナが同一であるならば、クシェートラジュニヤとジーヴァも同一ということになってしまう。クシェートラジュニヤとジーヴァが類似した機能を持つことは MBh 12.187.7-12に見られる。一方、クシェートラジュニヤとジーヴァをはっきりと別に見る説は『マヌ法典』12.12-14に見られる。
- 25 udbabarhātmanaś caiva manaḥ sadasadātmakam /
manasaś cāpy ahaṁkāram abhimantāram īśvaram // MS 1.14
次いで〔ブラフマーは〕彼自身から有と非有からなるマナスを、そしてマナスから自己意識であり主宰神であるアハンカーラを取り出した。
(サンスクリット文は Olivelle の *Manu's Code of Law* に所収のテキスト [Olivelle 2005] に、翻訳は渡瀬氏の日本語訳 [渡瀬 2013] にそれぞれ基づく。)
- 26 マナスからアハンカーラが生み出される説は、筆者が見た限り、上記の2例しか見つけられなかった。その他のエピック・サーンキヤの説では、アハンカーラから生み出されるか、あるいは16種の変異としてアハンカーラを含む8種の根本原因から展開することが想定されている。マナスの創造的機能はヴェーダ聖典に遡ることができ、エピック・サーンキヤでも説かれている。しかし、古典サーンキヤでは明確にアハンカーラから生み出されるものとして説かれ、マナスに創造的機能は全く見いだせない。おそらく後代になるにつれ、マナスの地位が低下していったと思われる。
- 27 引田氏によると、ヴェーハ神と原理を同定する説は、かなり混乱が見られるようであり、例えば、LT 第6章ではサンカルシャナをアハンカーラに、ブラディユムナをブッディに、アニルツダをマナスに、当てはめる説があると指摘している。また、後代になると同定ではなく、管轄者とみなす傾向も認められるという。初期にはパーンチャラートラの内部ではあまり重要視されていなかったが、シャンカラが取り上げて以来、問題が顕在化したとされる [引田 1997: p. 61]。

キーワード

ヒンドゥー教、インド哲学、サーンキヤ、パーンチャラートラ派、ヴェーハ